

1. 奈良・平安時代とは

「大化の改新（645年）」を境として、『律令』とよばれる「法律」に則り、全ての土地と人々を支配する『律令体制』が整備されたのが奈良・平安時代です。現在の奈良県や京都府が政治の中心地となり、藤原京・平城京・平安京などの都が中国の都を手本として整備されました。また、地方は国・郡・里（郷）という単位にわけられ、それぞれ国府や郡衙と呼ばれる役所が置かれていました。

政治と密接なかかわりを持つようになる「仏教」も、この時代になると地方へと広がりを見せるようになり、栄町の龍角寺を始め、印西市木下別所廃寺・佐倉市長熊廃寺などの寺院が建立されるようになります。

その後、10世紀位になると、中央の影響力が弱まりをみせ、各地には「荘園」が発達し、その中から平将門に代表される『武士』が成長して権力を握るようになり、やがて戦国時代へと時代は移ってゆきます。

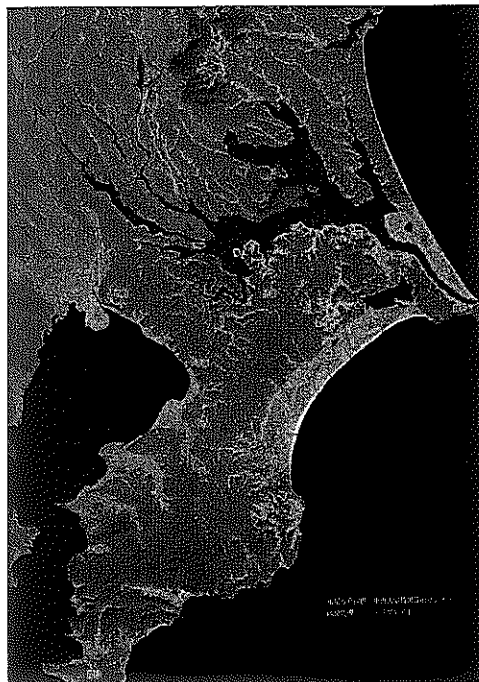


図1 奈良・平安時代の房総半島の復元画像

2. 奈良・平安時代のムラ（村）

政治の中心地に華やかな「都」が作られる一方、そこからはるかに離れた地方である千葉県内にも役所が置かれました。このような社会の変化の中で、いわゆる庶民の暮らしはどのようなものだったのでしょうか？

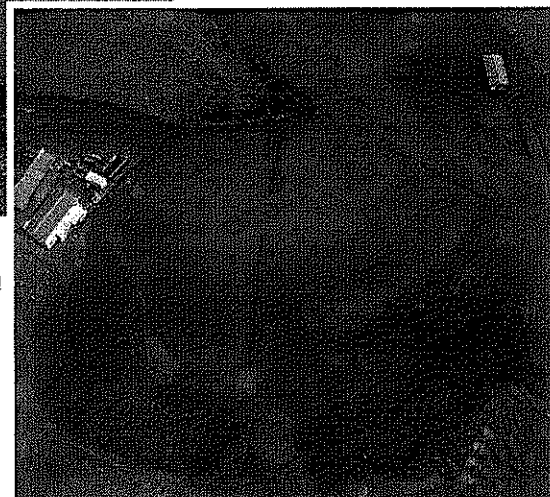
印旛郡市内で発掘された奈良・平安時代の遺跡の様子を見てみると、古墳時代から脈々と続く「大きな村」と、奈良・平安時代になってから初めて作られた「小さな村」の二種類が存在していることがわかります。

「大きな村」は前代の古墳時代から人や物が頻りに行き交う場所に営まれた集落であり、奈良・平安時代に至っても交通の要衝として重要な役割を果たした集落と考えられています。一方、「小さな村」は「三世一身法」や「墾田永年私財法」の施行によって開墾された開拓集落であったと考えられ、多くの人々が新天地を求めてこの千葉県の地に入植してきたと考えられます。

このような社会情勢を背景として、千葉県独自とも言える様々な文化が生まれ、特に信仰に関する遺物が数多く発掘されています。



← 図2 大きな村
佐倉市高岡遺跡



↓ 図3 小さな村
佐倉市六拾部遺跡

3. ムラ（村）の生活

奈良・平安時代の全てのムラに共通するわけではありませんが、開墾集落として考えられている小さなムラである佐倉市六拾部遺跡を例に当時の生活の様子を見てみることにしましょう。

このムラの跡では73軒の竪穴住居跡が発掘されましたが、それぞれの住居跡から出土した土器を観察すると、同時に存在していたと考えられる住居は一時期で5、6軒程度であったと推定されており、非常に規模の小さなムラであったことがわかります。住居の規模も古墳時代のそれと比較して極端に小さくなり、小さなものでは3メートル四方程度の大きさしかなく、柱の無いものも見受けられます。

